共働き両親のワーク・ライフ・バランス(WLB)および精神的健康と、子どもの情緒・行動問題との関連検討

(Association of parental work-life balance and mental health with their children's emotional and behavioral problems)

島田恭子[1)]・島津明人[1)]・川上憲人[1)]・藤原武男[2)]・伊藤淳[2)]

[1)] 東京大学大学院医学系研究科 精神保健学教室

[2)] 国立成育医療研究センター 成育社会医学研究部

Kyoko Shimada[1)], Akihito Shimazu[1)], Norito Kawakami[1)], Takeo Fujiwara[2)], and Jun Ito[2)]

[1)] Department of Mental Health、 The University of Tokyo Graduate School of medicine

[2)] Department of Social Medicine、 National Center for Child Health and Development

＜要　旨＞

【背景・目的】

核家族化・少子高齢化・共働き家庭の増加など社会構造の変化に伴い、働く人の精神的健康を考える上で、職場要因だけでなく職場外の要因、とくにワーク・ライフ・バランス(以下 WLB)を無視することはできなくなっている。また近年、WLB のあり方が個人を超えて周囲の人々の行動や健康にも影響を及ぼす可能性が指摘され始めた。つまり WLB が、労働者自身だけでなく配偶者の精神的健康や子どもの養育環境・発達等に影響を及ぼす“クロスオーバー”に関する研究である。しかしながらわが国で、親の WLB や精神的健康と子どもの発達などとの関連を検討したクロスオーバー研究はほとんどない。そこで本研究は、両親の WLB および精神的健康と、子どもの情緒・行動問題との関連を、共働き世帯を対象として検討することにした。

【対象・方法】

本研究は、2010 年より行われている「東京大学ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査 (Tokyo Work-family INterface study : TWIN Study) II」の一部である。東京都某区の保育園に子どもを通わせる共働き夫婦とその子どもを対象に質問紙調査を実施しており、本研究は 2011 年度調査を用いた(413 世帯)。解析は 2 歳児以上の子どもの情緒・行動問題(子どもの強さと困難さ ; Strengths and Difficulties Questionnaire、以下 SDQ)を従属変数とし、父親・母親の WLB および心理的ストレス反応(参照群＝低群<15 点として 2 値化)を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。WLB については「仕事から家庭へのネガティブな流出（例 :「仕事が大変で家庭でイライラしてしまう」）を 3 分位に分け、低群を参照群とした。SDQ (Goodman, 2006)に関しては、厚生労働省の示す SDQ 保護者評価の基準値を用い、子どもの困難さ合計得点および SDQ 下位尺度(行為・多動・協調性・仲間意識・向社会性)ごとの検討を行った。

【結果】

対象世帯のうち、父親・母親・子ども調査票で欠損のあるもの、1歳以下の子どもについての回答を除いた、有効回答 236 世帯を分析対象とした。各従属変数がカットオフ値以上となるオッズ比を検討した。その結果、「SDQ 子どもの困難さ合計得点」において、母親のストレス反応(OR = 2.72; $p = 0.078$)が有意傾向を示した。また「情緒の問題」においても、母親のストレス反応(OR 3.33; $p = 0.052$)が有意傾向を示した。

【考察】

本研究では、子どもの情緒・行動問題に関連する要因として、特に母親の精神的健康が示された。具体的には母親の心理的なストレス反応が、子どもの情緒・行動問題全般、特に情緒の問題に影響を与える可能性が示唆された。一方両親の WLB と子どもの情緒・行動問題との間には有意な関連は見られなかった。しかし先行研究において示されている「WLB は労働者個人の精神的健康に影響を及ぼす」というエビデンスを考え合わせると、今後「WLB→精神的健康→子どもへの影響（親の WLB と子の情緒・行動問題における親の精神的健康の媒介効果の可能性）」など詳細なメカニズムの検討が望まれる。

労働者の精神的健康と子どもの情緒・行動問題との関連が示された本研究は、産業保健領域における精神健康推進が、単に労働者個人のためだけでなく、その子どもの情緒・行動問題においても重要であることを示唆している。

<キーワード>

ワーク・ライフ・バランス、親の精神的健康、子どもの情緒・行動問題、子どもの強さと困難さ (Strengths and Difficulties Questionnaire; SDQ)

【はじめに】

WLB と精神的健康

共働き世帯が片働き世帯を上回って久しい我が国において、ワーク・ライフ・バランス(以下 WLB)の問題は、働く人の精神的健康にとって重要な要因の一つである。産業精神保健において WLB の問題は「複数の役割（仕事役割、家庭役割など）を持つことによる、仕事から家庭、あるいは家庭から仕事への役割間葛藤」と定義づけられる[1]。国内外のいくつかの研究により、この役割間葛藤、つまり WLB の崩れが、労働者の精神的健康の悪化に関連していることが、これまで明らかになっている[2-4]。

クロスオーバー研究

一方、個人の葛藤や WLB、またその結果生じる精神的健康などが、個人を超えて身近な人々(配偶者や家族、同僚など)に伝播する、というクロスオーバー研究も進んでいる[5, 6]。特に近年、密接な人間関係を持つ「家庭」という共同体の中で、WLB や夫婦関係、ワーカホリズムなどの夫婦間伝播についての研究が蓄積されている(7-9)。しかしその研究のほとんどが夫婦間に限定されているのが現状で、親の WLB や精神的健康が、生活を共にしている子どもの養育環境や情緒・行動にどう関連しているかを検討した研究はほとんどない。

本研究の目的

そこで本研究は、図 1.のように、両親の WLB および精神的健康と、子どもの情緒・行動問題

との関連に着目し、共働き世帯を対象として検討することとした。

図 1.

【方法】

1.対象

本研究は、2010 年より行われている「東京大学ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査研究 (Tokyo Work-family INterface study : TWIN Study) II」の一部である。TWIN Study は東京都某区の区立・私立保育園に子どもを通わせる共働き夫婦を対象に質問紙調査を実施し、労働状況や家庭状況、WLB や健康に関して調査したものである。TWIN Study II は新たに子どもの養育環境や生活習慣、情緒・行動や健康状況に関する質問を追加し、両親と子どもの関連についても検討できる大規模縦断研究である。東京大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得て行われた(承認番号 3245)。

本研究では親の WLB や精神的健康と子どもの情緒・行動との関連検討を目的として、2011 年度のデータを用いた。2011 年 11 月、前年度からすでにエントリーしている A 区の同意世 321 件と、新たに対象となった B 区の、保育園を通じた同意世帯 357 件、計 678 世帯に調査票を配布した。その結果 413 世帯(父親 344 名、母親 409 名、子ども 406 名)より回答を得た(回答率 60.9%)。このうち 2 歳以上の子どもについて回答し、父親・母親・子どもの各主要変数に欠損値のない、有効回答世帯 236 件を分析対象とした。

2.分析変数

本研究で分析に用いた変数は父親・母親の WLB 変数、精神的健康、子どもの情緒と行動、および基本属性(父親・母親の職業、子供の性)である。

1) WLB

WLB はオランダで開発された SWING (Survey Work-home Interaction - NijmeGen) 22 項目版 [10]の短縮版を用いた。SWING は 4 つの下位尺度 : 1. 仕事から家庭へのネガティブな流出(例 :「仕事が大変で、家庭でイライラしてしまう」など 8 項目)、2. 家庭から仕事へのネガティブな流出(例 :「家庭の問題で悩んでいるために、仕事に集中するのが難しい」など 4 項目)、3. 仕事から家庭へのポジティブな流出(例 :「仕事で培ったスキルによって、家庭での作業(家事など)もよりうまくこなすことができる」など 5 項目)、4. 家庭から仕事へのポジティブな流出(例 :「家族・友人と楽しい週末を過ごした後は、仕事もより楽しく感じる」など 5 項目)から構成され、それぞれ 4 件法(0 = 全くない、から、3 = いつもある)で回答が求められる。このうち本研究では、父親・母親の SWING 下位尺度 1.「仕事から家庭へのネガティブな流出」を用いた。合計得点を項目数で除したものを 3 分位に分け、低群を参照群とし、中群、高群の 3 群に分けた。

2) 精神的健康(心理的ストレス反応)

父親・母親の精神的健康尺度として、Kessler らによる心理的ストレス反応尺度が用いられた [11]。過去 30 日間にどのくらいの頻度で「神経過敏に感じましたか」、「自分は価値のない人間だと感じましたか」など心理的ストレス反応の体験を問う 6 項目から構成され、それぞれ 5 件法(1 = 全くない、から、5 = いつもある)で回答が求められる。本研究では、古川ら (2008)[12]のカットオフ値を参考に、尺度の合計得点が 15 点未満を参照群とし、15 点以上を「心理的ストレス反応あり群」とした。

3) 子どもの情緒と行動(強さと困難さ)

子どもの情緒と行動尺度として、Goodman らによる「子どもの強さと困難さ尺度」(以下 SDQ: Strengths and Difficulties Questionnaire [13,14]を用いた。これは日本語を含む約 60 カ国語に翻訳されており、5 つの下位尺度(行為、多動、情緒、仲間関係、向社会性)を持つ、幼児から就学前の行動スクリーニング尺度である。それぞれ下位尺度ごとの合計得点を算出し、その領域における支援の必要性が「ほとんどない」、「ややある」、「おおいにある」に分類する。また向社会性以外の 4 つの下位尺度(行為、多動、情緒、仲間関係)の合計を「子どもの困難さ合計(以下 TDS: Total difficulties Score)」とし、全体的な支援の必要性を把握することができる。本研究では、厚生労働省の示す SDQ 保護者評価の標準値[15]と、英国の保護者評価によるスコアの評価表を参考に、TDS および各下位尺度(行為・多動・情

緒・仲間意識・向社会性)のカットオフ値を設定した(行為:4点以上で「必要あり」群; 多動:6点以上で「必要あり」群; 情緒:4点以上で「必要あり」群; 仲間関係:3点以上で「必要あり」群; 向社会性:5点以上で「必要あり」群; TDS:14点以上で「必要あり」群)。なお本研究の対象者は厚生労働省の示す日本の標準値に比して「必要あり」群の割合が少なかったため、英国のカットオフ値を一部採用することで境界域の一部も「必要あり」群とした。

4) 基本属性

本研究では共変量として父親および母親の職業、子どもの性を分析に含めた。職業は「ホワイトカラー(管理職、事務職、専門職、営業職、サービス職)」、「ブルーカラー(製造業、農林水産業、保安・運輸業)」、「その他」の3群に分け、ホワイトカラーを参照群とした。なお子ども調査の対象は各世帯末子とした。

3.解析方法

父親・母親のWLBおよび心理的ストレス反応、2歳児以上の子どもの情緒・行動SDQ(子どもの強さと困難さ)の各下位尺度およびTDSを抽出し、それぞれの平均値と標準偏差、および変数間のピアソン相関係数を求めた。次にSDQ各下位尺度およびTDSを従属変数とし、父親・母親のWLBおよび心理的ストレス反応を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。TDSおよびSDQ各下位尺度(行為・多動・協調性・仲間意識・向社会性)得点がカットオフ値以上となるオッズ比を、人口統計学的変数(子どもの性・父親および母親の職種)、WLB・心理的ストレス反応を強制投入し検討した。解析にはSPSS17.0J (Windows版) を用いた。

【結果】

表1に対象世帯の基本属性の結果を示す。平均年齢は父親40.27 (± 6.10) 歳、母親38.53 (± 4.26) 歳であった。また子どもの質問票の回答者は母親が91.90%であり、ほとんどの世帯で母親が子どもの質問に回答したことが分かった。職業は男女ともにホワイトカラーがほとんどで、男性89.41 %、女性91.10 % に上る。教育歴に関しては、男性の 75.8%、女性の86.9%が短大以上の最終学歴となっている。雇用形態の非正規雇用の割合は男性の 4.24%に対し、女性は24.15%であった。2歳以上を対象とした子どもの平均年齢は3.73 (± 1.47)歳、男女比は男児52.97%、女児47.03%であった。

次に表2に各変数の平均値と標準偏差および変数間の単相関係数行列を示す。性別ごとのWLBおよび心理的ストレス反応の平均値の差では、WLB では男女間で有意差がない(男性:2.18 ± 1.79; 女性:2.01 ± 1.77; t = 1.156, p = 0.249)一方で、心理的ストレス反応のみ、有意に女性の得点が高かった(男性:9.91 ± 4.63; 女性:10.82 ± 4.80; t = 2.293, p = 0.023)。独立変数同士の関連においては、父のWLBと有意な相関を示したものが、母のWLB、父および母の心理的ストレス反応であるのに対し、母のWLBでは父のWLBと母の心理的ストレス反応であった。また上記に加えて、父と母の心理的ストレス反応が有意な相関を示していた。さらに独立変数と従属変数の間で有意な相関を示したものとして、TDS と父親のWLB および心理的ストレス反応、また SDQ下位尺度の1つ「情緒の問題」と父親のWLBおよび母親の心理的ストレス反応が有意な相関を示した。

最後に表3にロジスティック回帰分析の結果を示す。表にはTDSおよびSDQ各下位尺度を従属変数として、各独立変数における群別の人数とともに、参照群を1とした場合のオッズ比(OR)とそのp値、95%信頼区間を示した。なお、基本属性(子どもの性・父親および母親の職種)については、結果の煩雑さを防ぐため表示を割愛した。

独立変数において、各従属変数と有意な関連を示した変数はなかった。しかし母親の心理的ストレス反応が、TDS(子どもの困難さ合計)とSDQ下位尺度である「情緒の問題」に対して、それぞれ有意傾向のオッズ比を有していた(OR = 2.718, p = 0.078; OR = 3.333, p = 0.052)。

【考察】

本研究における対象世帯の特徴として、ホワイトカラーの割合の多さ、教育歴の高さ、が挙げられる。男女ともに大学院卒以上が 15%前後であり、男性の職種に関しては60%近くが、専門・技術・経営・管理職となっている。都心の富裕層の多い 2 区が対象世帯であることが要因の一つとして考えられる。また未就学児がいる共働き世帯であるにもかかわらず、全国平均に比して正規職員・従業員に対する非正規職員(パート・派遣社員等)の割合が極端に少ない(男性が5%、女性が25%程度)ことも特徴の一つである(全国平均:男性 19.7%;女性 54.5%)[16]。夫婦ともに高学歴、正規の労働者として、専門的かつ責任のある職務をこなしつつ、家庭では

小さい子どもを育て、仕事と育児の双方に関与している夫婦の特徴を示唆している。

本研究の主たる目的に関しては、子どもの情緒・行動問題全般と、特に情緒の問題に関連する要因として、母親の心理的ストレス反応が示された。母親の心理的状態とその子どもの情緒・行動・発達との関連については、主に発達心理学、小児科学等の分野において、母親の養育態度や夫婦関係との関連性も含め、研究が進んでいるところである[17-19]。特に Davies & Cummings (1994)[20]の提唱した情動安定性仮説では、家庭内の情動が子どもの不安定性を媒介し、行動上の問題や不適応を生起させる可能性を仮定している。本島(2013)[21]は、母親の抑うつ症状がその後の子どもの問題行動に影響することを、乳児を持つ家庭を対象とした縦断データで明らかにした。本研究においても、母親の心理的ストレス反応が子どもの情緒・行動に影響を与える可能性が示唆された。

さらに各変数単相関の結果では、母親の心理的ストレス反応と有意な相関を持つ要因として、母親自身の WLB に加え、父親の WLB および心理的ストレス反応も有意に関連していた。個人内での WLB と精神的健康との関連はメタ分析でも明らかになっている[2]が、いくつかのクロスオーバー研究でも、WLB がパートナーの WLB や精神的健康に関連する可能性も示唆されている[22-24]。これらのエビデンスを考え合わせると、母親や父親の WLB、および父親の精神的健康が、母親の精神的健康に影響を与え、それが子どもの情緒・行動問題につながっていく、という関連も考えられる。今後は、父親、母親、子ども、という世帯全体を考慮した各要因の詳細なメカニズムの検討が望まれる。

本研究にはいくつかの限界がある。まず横断データでの研究であるため、要因間の関連性を検討するにとどまり、因果関係の検討を行うことができなかった。今後縦断データを用いることで、因果関係を含めたメカニズムの検討を行い、これらの関連性を検証することが望まれる。次に本研究の対象者属性の偏りが挙げられる。地域調査の難点として回答率の低さがあるが、本研究においても、回答率は決して高いと言えず、WLB や精神的健康の悪い人が回答しなかった可能性が考えられ、選択バイアスにつながっている懸念がある。また前述のように、全国平均に比して学歴・職位が高く、都心の富裕地区に居住する子育て共働き世帯が対象となった本研究は一般化可能性にも限界があると言わざるを得ない。

しかしながら産業精神保健領域における WLB 研究において、父親・母親の WLB および精神的健康と、子どもの情緒・行動問題に着目したクロスオーバー研究は世界的に見てもほとんどないことから、「未就学児を持つ日本人共働き世帯において、母親の精神的健康が、子どもの情緒・行動の問題に関連している可能性がある」ことを示唆した本研究の意義は充分にあると言えよう。本研究の結果により、労働者の精神健康推進が、単に労働者個人のためだけでなく、その子どもへの影響という面でも重要であることが認識され、父親・母親の WLB および精神的健康と子どもの情緒・行動に関するさらなるメカニズムの検討が進み、要因間の影響検討が進んでいくことが望まれる。

表 1. 解析対象 236 世帯の基本属性

		人数	%	父親 人数	父親 %	母親 人数	母親 %	平均値	標準偏差
父親の年齢 1)								40.27	6.10
母親の年齢 1)								38.53	4.26
子ども調査回答者				19	8.10	217	91.90		
子どもの性別	男児	125	52.97						
	女児	111	47.03						
子どもの数								1.63	0.74
対象児年齢 2)								3.73	1.47
教育歴	高卒以下			57	24.15	31	13.14		
	短大・大学			131	55.51	174	73.73		
	大学院以上			48	20.34	31	13.14		
職種	専門・技術職			97	41.10	75	31.78		
	経営・管理職			47	19.92	12	5.08		
	事務職			23	9.75	96	40.68		
	営業・販売職			31	13.14	13	5.51		
	サービス			13	5.51	19	8.05		
	製造業			7	2.97	0	0.00		
	保安・運輸			7	2.97	0	0.00		
	育児休業中			11	4.66	21	8.90		
雇用形態	会社などの役員			20	8.47	5	2.12		
	自営業			31	13.14	16	6.78		
	正規職員・従業員			175	74.15	158	66.95		
	パート職員・派遣社員等			10	4.24	57	24.15		

注 1) 範囲はそれぞれ男性：24-64 歳; 女性:26-48 歳
注 2) 範囲は 2-10 歳

表 2. 各変数の平均値・標準偏差および変数間のピアソン相関係数行列

	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 父親　WLB(仕事→家庭ネガティブ流出)	2.18	1.79	1	0.193***	0.530***	0.177***	0.131*	0.090	0.028	0.146*	0.078	0.117
2. 母親　WLB(仕事→家庭ネガティブ流出)	2.01	1.77		1	0.024	0.489***	0.056	0.044	-0.028	0.060	0.088	0.058
3. 父親　心理的ストレス反応	9.91	4.63			1	0.191***	0.159*	0.120	0.088	0.106	0.089	0.095
4. 母親　心理的ストレス反応	10.82	4.80				1	0.112	0.079	-0.025	0.197***	0.046	0.088
5. SDQ　子どもの困難さ総合	8.82	4.30					1	0.674***	0.686***	0.629***	0.511***	-0.278***
6. SDQ　下位尺度-行為の問題	2.53	1.70						1	0.314***	0.237***	0.117	-0.147*
7. SDQ　下位尺度-多動の問題	3.00	2.02							1	0.136*	0.122	-0.284***
8. SDQ　下位尺度-情緒の問題	1.80	1.72								1	0.230***	0.014
9. SDQ　下位尺度-仲間関係の問題	1.49	1.36									1	-0.293***
10. SDQ 下位尺度-向社会性	6.58	2.06										1

注 1) *** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

表 3. 子どもの困難さ総合得点(TDS)および子どもの強さ・困難さ(SDQ)各下位尺度と、親の WLB および精神的健康との関連(236 世帯)

		人数	子供の困難さ総合得点(TDS)				SDQ下位尺度(子どもの困難さ)-行為の問題				SDQ下位尺度(子どもの困難さ)-多動・不注意の問題			
			オッズ比	*p*	下側95%	上側95%	オッズ比	*p*	下側95%	上側95%	オッズ比	*p*	下側95%	上側95%
父親　心理的ストレス反応 1)	低(参照)群	201	1				1				1			
	高群	35	1.989	0.258	0.604	6.546	2.144	0.194	0.678	6.776	2.299	0.345	0.409	12.927
母親　心理的ストレス反応 1)	低(参照)群	194	1				1				1			
	高群	42	2.718	0.078	0.895	8.258	1.227	0.732	0.381	3.951	3.703	0.149	0.626	21.924
父親　WLB 仕事→家庭ネガティブ流出 2)	低(参照)群	99	1				1				1			
	中群	91	1.983	0.217	0.668	5.889	2.092	0.153	0.76	5.762	2.23	0.392	0.356	13.971
	高群	46	1.562	0.523	0.397	6.143	1.078	0.915	0.274	4.239	4.073	0.196	0.485	34.175
母親　WLB 仕事→家庭ネガティブ流出 2)	低(参照)群	106	1				1				1			
	中群	93	2.103	0.138	0.787	5.623	0.917	0.851	0.374	2.253	1.219	0.812	0.239	6.232
	高群	37	0.193	0.148	0.021	1.798	0.182	0.123	0.021	1.586	0.271	0.36	0.017	4.44

		人数	SDQ下位尺度(子どもの困難さ)-情緒の問題				SDQ下位尺度(子どもの困難さ)-仲間関係の問題				SDQ下位尺度(子どもの強さ)-向社会性			
			オッズ比	*p*	下側95%	上側95%	オッズ比	*p*	下側95%	上側95%	オッズ比	*p*	下側95%	上側95%
父親　心理的ストレス反応 1)	低(参照)群	201	1				1				1			
	高群	35	1.11	0.885	0.271	4.543	3.333	0.157	0.63	17.639	1.336	0.65	0.383	4.664
母親　心理的ストレス反応 1)	低(参照)群	194	1				1				1			
	高群	42	3.333	0.052	0.989	11.233	3.589	0.123	0.706	18.241	0.556	0.39	0.146	2.118
父親　WLB 仕事→家庭ネガティブ流出 2)	低(参照)群	99	1				1				1			
	中群	91	1.988	0.26	0.601	6.573	0.678	0.649	0.127	3.615	0.958	0.923	0.4	2.293
	高群	46	1.462	0.635	0.304	7.02	0.721	0.749	0.097	5.36	0.386	0.184	0.095	1.571
母親　WLB 仕事→家庭ネガティブ流出 2)	低(参照)群	106	1				1				1			
	中群	93	1.485	0.489	0.484	4.553	0.977	0.98	0.164	5.842	1.137	0.772	0.478	2.703
	高群	37	0.411	0.342	0.066	2.575	1.453	0.718	0.191	11.076	0.702	0.622	0.172	2.87

1) 心理的ストレス反応　低群< カットオフ値 15；高群>= カットオフ値 15

2) WLB 仕事→家庭ネガティブ流出：下位尺度得点を 3 分位点で高・中・低群に三分割

参考文献

(1) Frone MR. (2003) Work-family balance. In JC Quick & LE Tetric (Eds.). Handbook of occupational health psychology. Washington, DC: American Psychological Association.

(2) Allen T, Herst D, Bruck C. (2000) Consequences associated with work -to-family conflict: a review and agenda for future research. J Occup Health Psychol, 5, 278-308.

(3) Watai I, Nishikido N, Murashima S. (2008) Gender difference in work-family conflict among Japanese information technology engineers with preschool children. J Occup Health, 50, 317-327.

(4) Shimada K, Shimazu A, Bakker AB, Demerouti E, Kawakami N. (2010) Work-family Spillover among Japanese Dual-earner Couples: A Large Community-based Study. J Occup Health, 52, 335-343.

(5) Westman M. (2001) Stress and strain crossover. Hum Relat, 54, 557–591.

(6) Westman M. (2006) Crossover of stress and strain in the work–family context. In: Jones F, Burke RJ, Westman M, editors. Work–life balance: A psychological perspective. East Sussex, England: Psychology Press.

(7) Bakker AB, Demerouti E, Burke R. (2009) Workaholism and relationship Quality: A Spillover–Crossover Perspective. Journal of Occupational Health Psychology, 14, 23-33.

(8) Bakker AB, Petrou P, Tsaousis I. (2012) Inequity in work and intimate relationships: A spillover-crossover model. Anxiety Stress Copin, 25, 491-506.

(9) Shimazu A, Demerouti E, Bakker AB, Shimada K, Kawakami N. (2011) Workaholism and well-being among Japanese dual-earner couples: A spillover - crossover perspective. Soc Sci Med, 73, 399-409.

(10) Geurts SAE, Taris TW, Kompier MAJ. (2005) Work-home interaction from a work psychological perspective: development and validation of a new questionnaire, the SWING. Work Stress, 19, 319-339.

(11) Kessler R, Barker P, Colpe L. (2003) Screening for serious mental illness in the general population. Arch Gen Psychiatry, 60,184-189.

(12) Furukawa T, Kawakami N, Saitoh M, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y et al. (2008) The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. Int J Meth Psych Res. 17, 152-158.

(13) Goodman R (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 38, 581-586.

(14) Goodman R, Ford T, Simmons H, Gatward R, Meltzer H (2000) Using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) to screen for child psychiatric disorders in a community sample. British Journal of Psychiatry, 177, 534-539.

(15) Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, Tanaka Y, Iwasaki M, Yamashita Y, Nagamitsu S, Iizuka C, Ohya T, Shibuya K, Hara M, Matsuda K, Tsuda A, Kakuma T (2008) Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): a study of infant and school children in community samples. Brain Dev, 30, 410-415.

(16) 総務省「労働力調査」(2012) 詳細集計 全都道府県—年報 http://www.stat.go.jp/data/roudou/index.htm

(17) Campbell SB, Brownell CA, Hungerford A, Spieker SJ, Mohan R, Blessing JS (2004) The course of maternal depressive symptoms and maternal sensitivity as predictors of attachment security at 36 months. Development and Psychopathology, 16, 231-252.

(18) Goodman SH, Gotlib IH (1999) Risk for psychopathology in the children of depressed mothers: A developmental model for understanding mechanisms of transmission. Psychological Review, 106, 458-490.

(19) 山縣然太朗・JCS グループ, 計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」平成 16 年度~20 年度 研究成果報告会 (2009) 独立行政法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター「脳科学と社会」研究開発領域

(20) Davies PT, Cummings EM (1994) Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. Psychological Bulletin, 116, 398-411.

(21) 本島優子 (2013) 家族の表出性と子どもの問題行動 ー母親の抑うつ症状と敏感性を

媒介として－　心理学研究 84, 3, 199-208.
(22) Bakker AB, Demerouti E, Dollard M. (2008) How job demands influence partners' experience of exhaustion: Integrating work-family conflict and crossover theory. J Appl Psychol, 93, 901-911.
(23) Matthews LS, Conger RD, Wickrama, KAS. (1996) Work-family conflict and marital quality: Mediating processes. Soc Psychol Quart, 59, 62-79.
(24) Shimazu A, Bakker AB, Demerouti E. (2009) How job demands affect the intimate partner: A test of the spillover - crossover model in Japan. J Occup Health, 51, 239-248.